

川口市立高等学校

令和 7 年度

ライブラリーニュース No.3 (11月号)

発行者 1-5 葛西

11月のテーマは「秋に読みたい心を揺さぶる本」です。読書の秋、と表現される時期に1冊でも誰かの心を動かさせられたらと思います。

「クスノキの番人」 東野圭吾 (実業之日本社)

主人公である玲斗は、理不尽な理由で会社を退職

腹いせでやった犯罪で逮捕されたがとある人物に救われた。

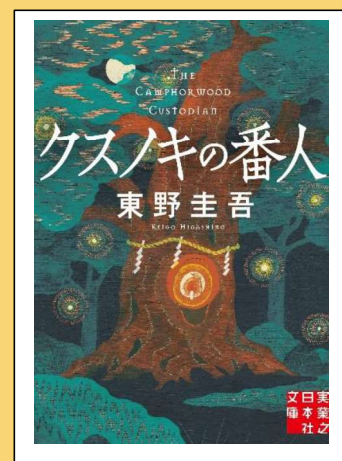
釈放の条件はとある神社にあるクスノキの管理人だった。

そのクスノキにはこんな言い伝えがある。「祈れば願いが叶う」

クスノキによって明かされる真実、それは奇想天外の連発。

クスノキの言い伝え、玲斗の出自、「クスノキの番人」の責務、

そして、最後に玲斗が見る景色とは…



秋の夜長に月でも見ながら、願いや人生の意味を考えながら、ぜひ読んでみてください。

「かがみの孤城」 辻村深月 (ポプラ社)

みんな、心に傷を抱えて生きている。

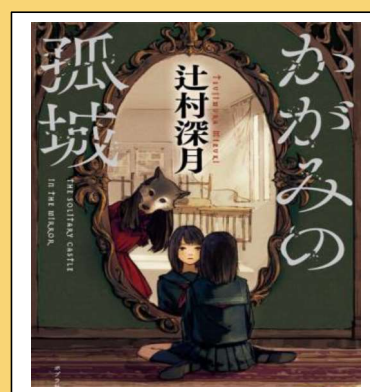
学校に居場所がない中学生のころ。

ある日、鏡を通して不思議な城へとたどり着く。

城には、ころろと同じように集められた中学生が6人。

そしてオオカミのお面をした「オオカミさま」。

この城にはどんな願いも叶えられる部屋の鍵が隠されているのだとオオカミさまは言う。

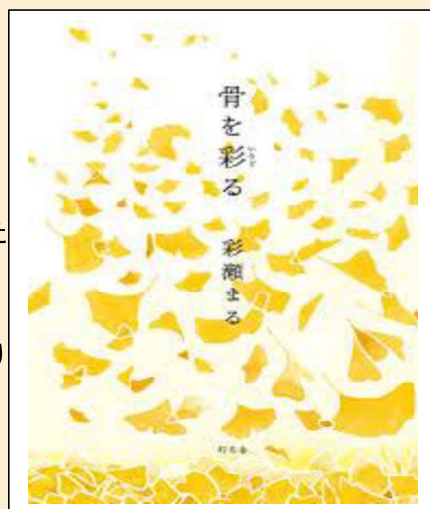


「骨を彩る」 彩瀬まる（幻冬舎）

「古生代のバームロール」「やわらかい骨」など
個性的なタイトルばかりの5話が収録されている短編集。

日常の中の感情が繊細に描写されていて、
一度は感じたことがあるようなふとした感情に言葉をぴた
あてはめてくれます。

切なくて、温かくて、淡々としていながらも生々しさがあり
心を揺さぶられる一冊です



「博士の愛した数式」 小川洋子（新潮社）

交通事故で記憶が80分しか保てなくなった元数学者である「博士」と、

彼のもとに派遣された家政婦の「私」、

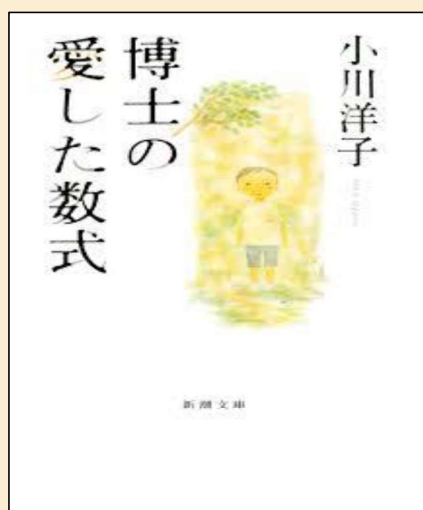
そしてその10歳の息子「ルート」が、

数学を介して心を通わせる物語です。

博士は「私」の息子を「ルート」と呼び、

美しく、驚きと喜びに満ちた数式の世界を教え、

三人の間に温かくも切ない絆が生まれていきます。



コラム 読書の秋の由来

「読書の秋」の由来は、古代中国の詩人「韓愈(かんゆ)」の漢詩にあり、「涼しい秋の夜に灯り(灯火)をともし読書をするのに適している」という考えが基になっています。日本では、夏目漱石が小説『三四郎』でこの詩を引用したことや、戦後に「読書週間」が制定されたことで、より広く定着しました

書影は出版社の許可を得て掲載しています